

なんでもねん

No.27-2/2

(現代語訳編)

方丈記

鴨長明

「一」 行く河の流れは絶えずして ———— 人と 悟との無常 ————

川は流れることなく、いつも流れている。そのくせ、水はもとの水ではない。よどんだ所に浮かぶ水の泡も、あちらで消えたかと思うと、こちらにできていたりして、けつていつまでもそのままではない。

世間の人を見、その住居を見ても、やはり、この調子だ。

土壁な京の町に競い違っている貴族の住居は、永久になくならないもののようにだけれども、ほんとにそうかと一軒一軒あたってみると、昔からある家というのは稀だ。去年建てて今年建てたのもあれば、大きな家が没落して小さくなったものもある。

住んでいる人にも、同じこと。それは同じ京であり、人は相変わらず大勢だが、昔会ったことがある人は、二、三十人のうち、わずかに一人か二人になっている。朝死ぬめがあるかと思えば、夕方生まれる子がある。まさによどみに浮かぶうたかたとそっくりだ。

ああ、私は知らぬ、こうして生まれ死んだりする人がどこからきて、どこへ消えてゆくのかを、また、いつたい、仮の宿であるこの世で、誰のためにあくせくし、どういう因縁で豪華な生活に気をとられるのか。そうしてあくせくした人も、その建てた豪華な邸宅も、先を争うようにして変わってゆく、消えてゆく。いってみれば、朝顔とその露に同じだ。露が先に落ちて花が残る。残って咲いているといううちに、日が高くなって枯れてしまった。花が先にしおれて露が消えずにいることもある。消えずにいるといっても、夕方までもつわけではない。

(中略)

「五」 また、養和のころとか、久しくなりて ———— 養和の飢饉 ————

また、養和年間のことだったか、もう年の記憶もはつきりしないが、二年間というもの、飢饉で、ひどいことがあった。春・夏、雨が降らなかつたり、秋、台風・水害など、運の悪いことが続いて、農作物がみんなだめになり、夏の田植えの行事だけがあつて、秋・冬のとり入れのにぎわいはない。

そのため、諸国の農民で、土地を捨てて国を去る者や、家を捨てて山に入ってしまう者が出てきた。朝廷では、いろいろな御祈禱がはじまって、尋常一様でない特別な御修法が種々なされたけれども、いっこうにそのききめがない。京といふ所は、とにかく何をしても、先だつものは田舎から米が来ることであつて、それを命の綱にしているのに、それがぜんぜん来なくなったのだから、いつまでも世間体ばかりつらくなっていられようか。早く立ち直ればいいがと心の中では願いつつも、どうにもならないままに、いろいろな家財を片端から捨ててうに安く売って食料に代えてゆくのだが、これはたいした物だと掘り出してくれる人もいない。第一、振り向い

ても見ない。ときたま換えてもらつても、金目のものが金目にならず、食料のほうが高くつく。乞食が道ばたに多くなり、どこへ行っても不平と嘆息の声ばかり。

第一年は、こんな調子で、やつと過ぎた。翌年は何とかなるかと思つてると、反対で、そのうに伝染病まで加つて、いいほうに向かう様子はちつとも見えなかつた。

世間の人みんなが巻きこまれて困っているのだから、どこに助けを求めようもなく、一日一日と窮迫していく状況は、まさに、いわゆる「少水の魚」だった。しまいに、笠をかぶり、足をくるんで、かなりの身分らしいかろうの者が、ただただ、ひもじきに一軒一軒食ををうて回るようになった。こんなに落ちぶれて、どうしていいかわからなくなった者たちが、歩いていきたかと思つと、ばたと倒れて、もう死んでいる。築地に、道ばたに、そういう餓死者が無数にあつた。死骸の取りかたづけようもないから、死臭が、そこいらじゅうに漂つて、腐爛してゆく様子は、目もあてられないことが多かった。

河原などときたら、馬や車も通れないほどだ。車輦な者、木こりたちも、力が尽きて、薪も持つてなくなったから、あてのない人たちは、自分の家をこわして、薪にして市で売つた。一人が持つて出た薪の値段が一日分の食料にもならなかつたという。変なのは、薪の中に赤い丹や箔などのついた木がまじつていて、聞いてみると、どうにもしようがなくなった者たちが、古寺に行って仏像を盗み、お堂の仏具をこわして、それを薪に割つたのだった。こういう末世の、悪い時代に生まれあわせて、こないやなことまで見なければならなかつた。

しかした、たいそう哀れなことであつた。別れられない妻や夫をもつた者は、愛情のより深い者のほうがきつと先に死ぬ。というのは、自分のことは2の次にして、相手のかわいそうだと思うために、たまに手に入れた食物を相手に先に食べさせるからである。だから、親子でいっしょにいるものは、きまつて、親が先に死んだ。また、母の息が絶えていもの知らずに乳のみ児が乳房にとりついているようなこともあつた。

仁和寺の隆 睦法印という人が、こうして無数の餓死者が出ることを悲しみ、行きあうごとに、死者の額に「阿」の字を書いて、阿字本不生の法縁に結んでやろうとされた。その人数を知ろうとして、四月と五月、数えたところ、京の一条から九条まで、東京 極から朱雀大路まで、つまり平安京の東半分の死体が、計四万二千三百余体あつた。いうまでもなく、三月以前、六月以後に死んだ者も多いし、賀茂川の河原、その東の白河、あるいは朱雀から西の京、その他、方々の郊外まで加算したら、きりがないうちがない。まして、畿外の諸国まで加えたら、どういうことになるうか。

崇徳天皇御在位の、長承年間とかに、やはり、こういう飢饉があつたそうだが、当時のことは知らず、この目を見た養和の飢饉だけはたしかに、こんなこともあるかと思うようなものだった。

(後略)

参考文献：①神田・永積・安良岡編訳『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』日本古典文学全集 小学館)

②永井路子の『方丈記・徒然草』集英社文庫

③安良岡康作『方丈記 全訳注』講談社学術文庫



阿字(あじ)